棚の上のなにか

ひと駅分の通勤小話

百名悟 Momona Satoru

毎朝7時12分発の
電車の網棚に
それを見つけたのは

ジメジメとした
梅雨の朝
だった

ピヨ
ピヨ

ストレス
社会の闇

幻覚

いよいよ
俺も限界
か

などと
思ったが
それは
意外に

疲れて
いなくても
毎日
見えた

ぱく
ちゅぱ
ちゅぱ
食った
食いましたね……
え？あ？
見えるんですか!?
私も幻覚と思ってました
そんな人が
けっこういたようだ
むっちゃ
むっちゃ
それからは生活が変わった
おはようございます
どもー
オハヨーゴザイマス
朝の電車の人々と挨拶をするようになった

今日エサ当番
宮崎さん？
久しぶり
です
なにせ
その時間
その車内では
結婚
らしい
ぞ
スゴイ
オメデトー
ここが縁で
結婚することに
本当ですか？
半分以上が
知人なのだ
苦痛極まりない
通勤ラッシュも
……
……
調子悪そう
ですね
す……
すいません
替わり
ましょう
お互い
気を遣えば
随分 快適だ
3
あいつの
お陰で
通勤が楽しく
なった
だが
そんな
日々にも
終わりが来た

ぎゃ
中年女性が腰を抜かし
車内は騒然となった
そしてあいつは姿を消した
オハヨーゴザイマス
ドモー
僕らには朝の挨拶の習慣だけが残った
あいつもどこか遠いローカル線で
網棚に乗っててくれればいいなと思う
おしまい